

第 26 回ミツバチ科学 研究会に参加して

相田 由美子

今年も昨年と同様に第 25 回記念大会と同様に 6 題の自由課題での募集講演があった。この 2 年間でそれぞれの興味と専門的な取り組みへの発展があり、身近な話題で活気ある会となった。参加者は 260 名以上となり玉川大学農学部の講義室も満杯であった。

自由講演では、「総合学科高校における養蜂農家と連携した教材開発の取り組み」で、筑波大学付属坂戸高等学校の先生、生徒の 3 人での学校教育の一環としての養蜂の実践を発表した。近隣の養蜂家の指導と協力を得て、積極的な蜜源植物の育成、蜂児、採蜜、ハチミツの利用法までのハチミツを考える姿勢に、新しい活力を感じ、次世代への養蜂関係者の育成につながればと、久しぶりの明るい話題であった。現在は宅地開発による蜜源植物の減少が進み、その中で苦勞もあると思うが、環境は人間を守っているということを実感として体験し、大切に守らねばならないことを一人でも多くの若い世代に伝えていただきたいと思った。養蜂を通して、植物の育成、動物とのかかわり、食品、食生活へと続く一連のつながりを総合的に理解することができると思う。少なくとも樹木の種

子の成長から、花が咲くまで 10 年以上の単位で考えて欲しい。今後も昨年発表された岡山の高松農業高校とともに養蜂を是非続けていきたい。我が家の庭でも、実生からの植物、キウイ、カキ、エゴノキ、ツバキ、サザンカ、ヤマザクラなどがあり、収穫の喜びと同時に蜜源になればと願って日頃の楽しみとしている。

その他の講演では、自分の経験を通じてえられた養蜂に関する知識、スズメバチの防御法(装置など)、ニホンミツバチなどを例として、多くの人に知らせることで聴講者が何かヒントを得る貴重な機会となっていた。自分のことのみでなく広く「養蜂」の発展を見据えた視点からの発表は今後の発展につながるであろう。

特別講演 2 題は、「ミツバチはどのようにプロポリスを作るのか?」、「ローヤルゼリー中に新たに見出された品質指標物質「ロイヤラクチン」の構造と生理機能」と身近な題であるのに意外に基本的なことが知られていなかったと気づかされた。

プロポリスをセイヨウミツバチは集めるが、日本ミツバチは集めない。ミツバチの行動についても非常に興味深いものがあり、ハチミツで歴史のあるコーネル大学に留学された中村純氏の、昆虫とプロポリスの関係、コーキングの位置やプロポリスの材料(樹脂)についての説明は興味深いものであった。

「ロイヤラクチン」についても鮮度との関係や物質そのものの構造について述べられ、今後のさらなる研究が期待される。

さて、今「ハチミツ」など養蜂生産物が注目されている。昨年は食品衛生法で輸入品に関す



参加者増で満席となった会場



ロイヤラクチンについて講演中の鎌倉昌樹博士

る問題が発生した。食品に対する安全性についての認識を再確認させられたが、このことを契機として、各自が責任をもって管理していくことが必要である。蜂産品における蜜源の確保、蜂群の管理、採蜜、瓶詰めなどに至るトレーサビリティのシステム作りを始めることが第1歩であると感じている。輸入については国により難しい事情があるものの、まずはできることから始めることではないだろうか。

「ハチミツ」に関しても、まだ簡単に思える

ことでわからないことが多くある。自然とのかかわりが強いのでなかなか研究結果が一定しないこともあるが、長期間続けて研究していただき、ミツバチ科学研究会で1つでも多く発表されることを願ってやまない。

ミツバチ科学研究会のますますの発展を祈り、この会の開催に尽力されている皆様に感謝したい。

(〒103-0023 中央区日本橋本町4-8-17 共同ビル
(社) 全国はちみつ公正取引協議会)

ニュース



APIMONDIA

アピモンディア シンポジウム 発展途上国のハチミツ国際取引に関わる諸問題

2004年11月23日～28日 ハノイ

主催：ベトナム農業開発省ミツバチ研究開発センター、
アピモンディア養蜂経済、村落開発養蜂、蜂病各常任委員会



MARD

アピモンディア蜂病委員会が2002年10月にドイツで開催した“ハチミツ中の残留物質防止対策”シンポジウムでは、この問題が含む複雑で多様な側面が明らかにされた。しかしハチミツ市場に加わりつつある発展途上国からの出席者は少なかった。

ハチミツの国際取引では、輸入先の基準を満たす品質が前提条件であり、蜂場から取引市場までのすべての段階でそのことが理解される必要がある。ハチミツ輸出をめざす途上国の政府関係部局は、輸出相手国の法規制を理解、遵守することを求められる。EUに輸出する場合、ハチミツ中に農薬、抗生物質、その他の残留物質を含まないと、産出国が証明することを要求される。残留物質は蜂病対策で投与された薬品、蜂群管理中に混入した物質、周囲の汚染された環境からの混入物などである。

残留物質を含まないハチミツの需要増加は途上国のハチミツ生産に大きなチャンスである。今回のシンポジウムの目的は、途上国で活動するハチミツ生産者が国際市場により多く参入できるように、彼らを支援することである。その

ために以下のような立場を異にする人たちが一堂に集う場とした。

発展途上国のハチミツ生産者団体、ハチミツ貿易専門家、残留物質に関する法規制の準備、制定に携わる人、残留物質の同定、定量に関わる研究者、残留物質を含まないハチミツ生産管理方法の研究者。

これら分野の皆様は、2004年11月23-28日にハノイにお集まり下さるようお招きする。

登録費用は2004年7月30日まで参加者270米ドル、同伴者170米ドル。登録費は会議資料、昼食、お茶、見学旅行参加費を含む。また、発表論文要旨の締め切りは8月31日。

(第1回案内より抜粋)

発表申込み、見学旅行、展示会の概略などはアピモンディアのウェブサイト (http://www.beekeeping.com/apimondia/index_us.htm) を参照いただきたい (またはミツバチ科学研究所にお問い合わせ下さい)。日本からも関係各位にできるだけ多く参加していただくのが望ましい状況であろう。